

『荒地に立つ』

樋口ミユ

登場人物

たまこ

ねおん

ドリフターズ

男1・天使1・黒い父の影・黒いゆかりの影・医師の影・研究者D

男2・天使2・黒い母の影・黒いあやのの影・研究者Z

男3・天使3・黒い彼氏の影・黒いちかの影・研究者A

叔父（とはいうが）

下着姿のたまこがいる。

びよんびよんと、風船の口部分を指先で伸ばす。

ぷうと、膨らませる。

すると聞こえてくる。

たまこのつぶやく声。

それは生身のたまこから発せられるのか。

たまこの脳内に響く、たまこの心の声なのか。

どちらでもあるだろう。

生身の、あるいは脳内の、たまこの言葉は、

空中に「言葉」そのものが浮かんで消えることも、あるだろう。

たまこ

荒地にはなんも育たない。

花も果実も、雨を染み込ませても。

荒地だから実りはない。

荒地にはなんも育たない。

そのかわりに、

荒地にはスイッチが隠されている。

花の種を作り出すスイッチ。

果実を甘くするスイッチ。

雨の中から必要なものを吸い取るスイッチ。

荒地にはなにも育たない。

スイッチだけがある。

それが、荒地以外の土地を実らせる。

たぶん、**実り**のスイッチもあれば、

破壊のスイッチもある。

荒地には全てのスイッチが、

埋まってる。

私は探す。

荒地を探す。

固い乾いた土を掘り起こす。

爪の間に入り込んで黒い。

そのうち、

あんまり固いから、

土に負けて爪が剥がれる。

血の赤色まで吸い込むけど、

すぐに乾く。

乾く。

乾く。

乾く。

荒地は乾いて、

私は泣き始める。

それもすぐに、乾く。

掘っても掘っても、

スイッチは見つからない。

やがて剥がれた爪の先の、指の肉まで剥がれる。

骨が見える。

骨が砕ける。

荒地で私は立ち尽くす。

この荒地を濡らす大雨を、祈る。

風船を膨らませ終わると腹に当てて、

サラシをまく。

その上から、服を身につけ、最後に、

割烹着を着た。

Piece 1

暗闇。

吸っては、吐く。

呼吸。

吸ったぶんだけを吐き出す。

息。

弱く強く呼応する赤々と燃えるように光る。

よく見ると、丸まった人体の影が見える。

それは赤々と燃えるように光り、黒い塊の人影がひととき鮮明に浮かび上がる。

それがなんなのか、分からなくてもよろしい。

3人の男たち。

それも影しか見えない。

まるで我が家に帰ってきたように、

その赤々と燃え光るものに足を突っ込む。

Piece 2

ゆんわりと、街灯が灯る。

路上に、危なげに斜めになった街灯がひとつ。

まだLEDではない街灯がひとつ。

時代遅れのように灯っている。

街灯の灯りのおかげで、

あの赤々としたものの正体が見えてくる。

もう赤々とは光っていない。

路上の街灯が映し出すのは、

こたつ。

路上にこたつ。

防寒着を着た3人の男たちが背中を丸めて温まる。

男3が、鼻歌歌う。

ババンババンバンバン

ハアビバドン

ババンババンバン

ハアアビバドン

男3 はあみがけよ。

ババンババンバンバン

男3 宿題やれよ。

ババンババンバンバン

男2 なにそれ。

男3 ドリフだろ。

男2 ドリフ？

男1 ドリフターズ？

男2 ああ、漂流者ネ。

男1 また来週」のドリフターズだって。

男2 え、だから漂流者でシヨ。

男3 ああ、久々に見てえなあ。あの生放送。テレビはあくまでブラウン管だ。

男2 エ、漂流者とテレビがなんで関係あんの。

男1 お前うっせえなあ。なあこれどこから電気もらってるの。

男2 裏のコンビニ。看板つけるようなコンセントが店の外の壁にあつて。

男1 あ、電気泥棒。

男2 シェアだヨ。

男3 冴えてるな。やつは路上生活もおシャンテイにしないと。

男1 なんだおシャンテイって。

男2 こたつが？

男1 こたつは昭和だろ。

男2 でもいいよねえこれ。

男3 ストリートライフ。

男1・2 え。

男3 路上生活じゃねえ。ストリートライフ。

男1・2 おシャンテイ。

男3 これで凍死はしないな。

男1 おい。さっきから。

男2 ん？

男1 足、邪魔。

男2 エエッ！ こっちは遠慮してるのに？

男1 じゃお前か。

男2 おマエか。

男3 え。違うわ。見ろ。

男3、突っ込んでいない足を見せた。

男1・2 あ。

ならば、と気がついて。

男たち、コタツ布団をめくりあげる。

男たち　ねおん。

と、ねおんが丸まっている。

男1　お前ねえ。

男2　屈託ナ―イ。

男たちはこたつからねおんを引きずり出す。

男3　それを独り占めっていうんだ。

男1　ねお―ん。

男2　みんな寒いの一緒だからこそそのシエアなのに。

男1　ねおん、起きろ。

男3　ぐにやぐにやのほかほかだな。

男2　で、こたつで丸くなる？

男3　こたつで丸くなる猫は湯たんぽがわりだからな。

男2　猫じゃねえだろう。

男3　似たようなもんだ。

男1　起きろ、ねおん。

男2　猫のほうのマシネ。ねおん、にやあさえ言わない。

男1　あ。起きた。

ねおん　ぐう。

男3　また寝てんじやねえ。

男2　ね―お―……

ガン。

音がした。

見ると、割烹着のたまこ。

オタマ片手に、持っている寸胴の鍋を叩いた。

Piece ㉟

たまこ 炊き出し。

男たち、防寒着からマイ皿とマイスプーンをさっと取り出し、こたつに置く。

男たち あざーす。

たまこ、なんの味もしないようなスープを皿に注ぐ。

しかしねおんは皿もスプーンもない。

こたつにおでこを突っ伏して。

たまこ …… いらなの？

ねおんは黙ったまま。

男1 おま、皿とスプーンどうした？

男2 マイスプーンないと命とりだヨ。

男3 どっかに忘れたか？

たまこ いらないね。

男1 あ、おねえちゃんごめんね。こいつ無口で、

男3 しゃあねえから俺の皿にちよつと多めに入れてやってくんない？

男2 ソソソ、こいつのぶんを僕らの皿に、

たまこ ひどいっばいです。

男たち え。

たまこ ひとりにいっぱい。そういう規則ですから。

男1 ……つつつても、ね、こいつのぶん、

たまこ 規則ですから。

男1 いやいや、この状況見てわかるよね。おねえちゃん。

たまこ 規則。

男2 頑固ネ。

たまこ 頑固ではありません。規則です。

男3 例外って言葉知ってるかい、おねえちゃん。

たまこ 例外なんて認められません。

男1 カタイ、カタイよ、おねえちゃん。寸胴持ってる割烹着ボランティアはみんな俺たちストリートライファーの味方でしょ？

たまこ ストリートライファー？

男たち ストリートライファー。

たまこ 何万人いると思ってるんですかこの時代。そのうちの半数が呑んだくれ。残りは愚痴をこぼして日が暮れる。

男1 ちよ、ちよちよ、今の引かかるよ、今の言い方。好きでストリートライファーになってるわけじゃなくて、

男2 マママママ。

男1 誰がっらいって俺自身がっらいしね。

男2 ママアママア。

男1 ちよ、分かるか、おねえちゃん。機械とガイコクジンに仕事取られたこのつらさ分かる？

男2 アレ、俺も外国人だけど？

男3 あ、そうなんだ。

男1 へえーお互いつらいねー。

男2 うん。もうどこもかしこも溢れかえってるからネ。

男3 日本語うまいからわかんなかったよ。

男2 こっちだっているいろ大変だヨオ。

男1 政治が悪いんだよ政治が。

たまこ じゃ規則なんです。

男1 おい、帰るな。

たまこ や、だって、楽しそうな会話が始まったしもういいのかと、

ねおん、すつくと立ち上がって向こうの空を見た。

たまこ あっ。

たまこ、思わず大声をあげる。

男1 えなに。
男2 エなになに。
男3 いて、おま、いま、あし、

ドンと花火の音。

男1 なにあれ。

男3 花火だろ。

男2 エ、なんの。

たまこ オリンピック前夜祭でしょ。この寒空に。

男1 浮かれすぎじゃね？

男3 実際浮かれてんだな。

男1 やっと開催できるから。

男3 真夏の開催が押しに押ししてこれじゃもう冬季オリンピックじゃねえかって前代未聞。

男2 語り草になるネ。

男3 イワクつきだな。

男2 ナンデ？

男3 あん？

男2 ナンデ押し押し？

男3 ほんとの理由を末端が知るわけねえな。

男1 それでも健康ならあっちの工事のバブリーにあやかれたのにあ。

男3 しやーないわな。土木作業できねえのよ俺、腰やられてっから。お前びっこだろう。

男1 びっこ以前に俺漢字読めないから。でもお前、土木作業無理なわりにはなんでこっちの仕事にはありつけたんだ？。

男3 トッカンでいいからだろ。

男1 一応シェルターなの？

男3 形だけなんじゃないの。

男1 金やっすいしな。賃貸もできねえくらいだ。

男3 だからこのストリートライフ。

男2 エ、僕らシェルター造ってんの？

男3 知らねえけど。

男2 知らないのになんで話してんノ。

男1 そーゆー、ウワサ？

男2 エ、オリンピックの街には同時にシェルターも作らなきゃなんない規則とか？

男3 やー、シェルターかどうかもワカンねえんだけどな。

男1 なんせイワク付きの開催だから。

男2 エ。政治的なことも含めて？

男3 知らねえけどな。

男1 なんかデカイもんには間違いないわ。

男3 だから末端が本質を知るわけねえしな。

男2 つぼい？ ってカンジ？

男1・3 ってカンジ。

男2 シェルターって、ヒナンジョ？

男3 だなー。

男2 ナニから？

男1 なんでもいいんじゃない？

男2 借金取りから。

男3 俺は嫁と息子からだな。

男1 あ、そういう使い道もありか。

男3 あ？ お前はなんでシェルター組？ あっちのバブリーに行けなかったのか？

男2 ア、僕はこう見えて実は指3本足りないのネ。

男1 え、お前いかついな。

男2 僕、香港マフィアの血筋だから。

男たち マジか。

男2 嘘。

男たち マジか。

男1 こいつは最低限のコミュニケーションさえ取れねえからなあ。

男3 あっちの炊き出しは豪華だって話だ。

たまこ 贅沢言わないでください。こっちだって全部ボランティアなんだから。規則は規則。ではまた明日。

たまこ あ。

ねおんを見る。

たまこ あんた。これ。

たまこ、一冊のノートをねおんに差し出す。

たまこ 忘れ物。

差し出されたノート。

ねおんはそれを受け取る。

どうやら彼のものらしい。

たまこ 偶然。でも渡せてよかった。

突然のやりとりに男たちは置いてけぼりをくらっている。

男1 え。

男2 エ、なにこのやりとり、

男3 あ、知り合いか、

男1 あ、

男2 エ、

男3 ああ、

男1 え、お前なんか知ってる、

男3 あ、ごめん。全然わかんないのに意味深な言い方して。

男2 紛らわしいネ。

たまこ 別に。知らない。名前も言わなかったし。それ忘れてたでしょ。

男1 え、どこに。

たまこ ラブホ。

男たち なにっ。

男1 ねおん、お前どこにそんな金が！

男3 いや、それよりこいつどうやってラブワーカーのお姉ちゃんを呼び出した、電話か？

男2 エ、じゃそんな時喋ったの！？

男3 いや、それよりお嬢さんがラブワーカーっていうのに興味があるな。

男2 エ、ねおん喋れんの！？

男1 おい、いま喋ってみろって、へいへいへい。

たまこ 喋らないよ、この人。

男3 じゃ、お嬢さんのほうからラブワーカーの営業をかけたってこと？

たまこ オジさんたちさつきから近い寄り添うな離れて。それからなにそのラブワーカーって。

男3 風俗嬢、とは言わねえ、ラブワーカーだ。

男1、2 おシャンテイ。

たまこ 確認もせずに見た目で私を風俗嬢だと決めてかかったそのゲスっぷりを後悔しな。

と、注いだスープを全て寸胴に戻す。

男たち ああっ！

男たち、悔やむ。

たまこ じゃ、渡したからね。

男たち ちよちよちよ、

たまこ 何ですか。

男1 チラ見せしてそのうえスープお預けで帰るのなし。

男2 エ、なに、二人はそーゆー関係？

男3 ま、コタツで落ち着いて話そう。

たまこ 落ち着かないし、話さない。けど誤解は解いておくわ。ラブホの掃除のバイトに来たのに1日で無断欠勤。お前の教え方が悪かったんじゃないのかって、オーナーに嫌味言われて最悪。でもよくあることです。で、その時の、忘れ物。一ヶ月ちよっと前くらい？

男たち ああ。

たまこ 何ですか。

男たち 面白くない。

たまこ ご期待に添えませんが。

男3 つらいねえ。

たまこ は。

男1 え、なにが。

男3 若いのに、ラブホで掃除の仕事って。身重なのに。

男2 エ。

男3 え。

男1 え、身重？

男3 そう、身重。

男1 え、この割烹着！？

男3 だよね？ おねえちゃん。

男2 エエ！？ 身重！？ って、ナニ。

男3 だから、これ。

手でお腹を丸くなくて突き出した。

たまこは否定するわけでも肯定するわけでもなく。

男2 妊婦の顔じゃないケド。

たまこ また偏見ですか。

男1 俺、気づかなかったくらいだよ。

男3 割烹着でわかりにくいけど、臨月？

男2 リンゲツって、

男3 もうすぐ生まれる。

男1 え、産休とったほうがいいよ。なんで割烹着のボランテアなんてやってんだ。

男3 いろいろあるんだよシングルマザーは。

たまこ シングルと決めつけるのはやはり偏見ですか。

男1 だって妊婦でラブホ掃除勤務でボランテアで炊き出しを手伝うって……

男3 シングルマザーだな。

男2 ワーキングプアの最底辺。

男1 おお、俺らの先輩みたいなもんだな。姐さんって呼ぶ？

たまこ 呼ばれたくないし呼ばせない。

男2 ねおん、ラブホの仕事、1日でやめるって最短記録だネ。

男1 ま、きつい仕事だしね。

男2 でも無言で出来るのに。

男3 こいつは繊細なのよ。

男2 え、そうなの。

男3 いや、知らないけど。

男2 喋らないから知りようもないカ。

男1 なあ、ねおん。

ねおんが男たちを見た。

男1 お前さ、ビョーキでもないのに、マジで、なんで喋らないんだ？

ねおんは、曖昧に微笑むしかない。

男たちの会話から視線を外して、

たまこから返されたノートを開く。

と、

ページが一枚、ちぎられていた。

ねおん、たち上がる。

男1 ん？

ねおん、なにか言いたくてふるふるする。

たまこ ……なによ。

ふるふるする。

男3 おま、大丈夫か？

と、男3が言いかけた時、

男3 ちよ、ねおん！

コタツを踏み越えて、ねおんがたまこの襟ぐりをつかんだ。

男たちがねおんを止めようとするが、それよりも先に、

たまこ、ねおんの手をつかみ、見事に背負い投げ。

男たち おおっ！

地面に仰向けに転がったねおんを見下ろす。

街灯が、ねおんを照らし出す。

たまこ 護身術くらい習ったことあるのよ。通信講座だけど。

ねおん、立ちあがり。手を出す。

たまこ は、なに？

ふるふる首を振る。

たまこ なに。

ぐっとまた手を突き出す。

たまこ いや分らないし。

片方の手にぐっとノートを握りしめ、もう片方の手を突き出す。

たまこ だから分からないから察せな、

ぐっと突き出した手はたまこの顔中央を突き刺す。

たまこ 痛いなもう！

ねおん、ノートを顔の高さまで上げる。

たまこ そのジャスチャーするくらいなら言えば！？

たまこ。

大声出した瞬間に、体が強張る。

たまこ あ。

男たち え。

男たち、なにが起こったか分からなくなる。

ねおんもまた。

たまこ やだ。

たまこ、お腹に触れる。

たまこ 背負い投げなんか、させるから、

男2 させてはナイ。

ゆっくりとうずくまり、

たまこ 大声、なんか、出させる、から。

男2 いやだから、

たまこは腹を抱え、ねおんはおろおろするのみ。

たまこ きゆうきゆう、しゃ、

ねおんは見てるだけ。

たまこ なにやっつてんのよ、見りやわかるでしょ。はやく、はやく救急車呼んでっつーか自分で呼ぶわ！

ドップラー効果よろしくやってくる救急車。

Piece 6 病院

そこは病院へと変わる。

たぶん三人の男たちが突如白衣の天使に扮したりして。

イカつい白衣の天使。

天使1 先生先生急いでください。急患です急患です休肝日です。

天使2 今あんた休肝日って言った？

天使1 言っじゃないわよ。

天使2 言った言った。

天使1 言っつて、

天使3 ちょっとコゼリあつてる場合じゃないわ。

天使1、2 婦長！

天使3 最近不調の婦長です。

天使2 ダジャレは嫌いです！

天使3 ダジャレにはならないわ。だって今は婦長じゃなくて師長なもの。

天使1 とにかく急いで！ 先生先生先生！

たまこ ううううう生まれる！

天使1 生まれますふちよー。

天使3 師長よ。

天使2 生まれますふちよー

天使3 師長よ。

なぜかこたつを救急ベッド代わりに滑り出してきて、

その上にたまこを乗せる。
たまこ、まるで産気づいているみたいに唸る。

天使 2 婦長師長、もしかしてこれは破水したのでは！？

天使 3 キケン、キケンだわ。

天使 1 先生先生先生立ち飲み屋に行っちゃったかしら。

天使 2 オタクは旦那さま？

ねおんは首を振る。

天使 2 あらじゃあ内縁の夫？

天使 1 その内縁の夫って言葉どうかと思うわ。もう犯罪の匂いがプンプンする。

天使 3 まさか妊婦虐待じゃないでしょうね。

ねおん、激しく首を振る。

天使 3 じゃどんな関係！？ 兄？ 弟？ 父？ 母？ 親戚？ 幼馴染？ 何なの！？

あんたと妊婦はどんな関係なのさあおっしやい！

Piece 7 ねおん

「どんな関係？」

ねおんの頭の中に言葉がふわりと浮かぶ。
ねをんの体の中は、やけに静か。
なんの音もせず、ただ、言葉が静かに浮かんでは消えていく。

旦那？
内縁の夫？
兄？
弟？
父？
母？
親戚？
幼馴染？
妊婦と、
どんな
関係
さあ
おっしやい」

言葉はあとからあとからふわふわと舞う。
この言葉は婦長が言った言葉。

そのうち、婦長の言葉ではない言葉も、
ぼんやりふんわりと、浮かんで飛ぶ。

風に舞う雪みたいに、花みたいに、ふわふわと、ひらひらと。飛ぶ。

知り合い」

違う」

通りすがり」

違う」

顔見知り」

何も知らない」

どんな」

関係」

うて」

ただ」

返してほしくて」

あの1ページ」

あ、だめだ」

また、」

僕は、」

言葉で考えている」

言葉」

「がいの」

言葉を」

言葉を」

超える」

言葉を」

探さなくては」

Piece 8 再び病院

はたと我にかえる。

現実の音が戻ってくる。

廊下を走る看護師の足音。

扉の閉閉。

ストレッチャーの音。

ナースコール。

天使 1 ふちよー！

天使 3 師長よ。

天使 2 ふちよー！

天使 3 師長よ。今この男を尋問している最中なのよ静かになさい！

天使 1 それどころじゃありません。

天使 3 男女の関係性は大事な問題よ。

天使 1 ふちよー！

天使 3 師長よ。

天使 2 ふちよー！

天使 3 師長よ。なに！？

そこに妊婦はいない。

スレンダーな体のたまご。

天使 3 え産まれたの。早くない？

天使1 いえ。

天使2 この妊婦、妊婦ではありませんでした。

天使2が、たまこの腹を膨らませていただろう
大きな風船を抱えている。

瞬間、

パチンと割れた。

なにもない。

ぼんやりと浮かぶ。

「このひと、も、不自由な、ひと、だな」

そうじゃない、と、

ねおんは浮かんだその言葉を手で払いのけた。

Piece 9 爆音の街

スクランブル交差点の音。

ボリュームは最大。

誰かの笑い声。

足音。

耳元を過ぎる会話、聞き取れはしないが。

大画面から何かニュース。

オリンピックのこととか。

水爆実験のこととか。

憲法のこととか。

全てが途切れ途切れではっきりとは分からない。

電車の音が入り込んでくる。

宣伝カーがぐるぐるまわるめぐる。

爆音の街の音が、

少しずつ高速回転し始める。

加速していく音。

速く、

速く、

速く、

通り過ぎていく。

ねおんとたまこは、

こたつのうえに腰をおろし、

高速回転する爆音の街をただ見ている。

急激に、静寂。

Piece 10 深夜

たまこ あんたのせいだからね。

ねおんは答えないが、たまこを見る。

たまこ 終電、逃しちゃったじゃない。

たまこから視線をそらす。

たまこ あんたが黙り決め込んでるから怪しまれて警察まで来るハメになって。なんでもんなオオゴトにされなきゃなんないのよ。拳銃持ってるわけじゃないし覚せい剤持ってるわけでもないのに、過敏よ。警戒レベルが上げられたってニュースになってたけど、ホントだったんだ。没収されちゃったじゃないよもう。また新しいの仕込まなきゃ。

たまこの腹はぺったんこ。

たまこ そんなに浮かれてんの、この街は。

パチンと風船を取り出して、息を吹き込んで膨らませる。

たまこ、向こうの街を見た。

たまこ なーんか。

たまこ 昼間よりいいわ。

たまこの言葉に、ねおんも向こうの街を見た。

たまこ はっ。

膨らませつつ。

たまこ こっから見ると綺麗だわ。

たまこ どうでもいいのに。見ちやう。

たまこ みんな寝てる時間の、あれ。

たまこ マンションの窓から部屋のあかり。

たまこ 看板のネオン。

たまこ うるさいのに、なんか静か。あれに似てる。あれ。あー、あの感じ。うまく言えないけど……

たまこ、しばらく考える。

たまこ 深海。なんかけだるい。けど。

たまこ 荒地より、いい。

たまこの言葉に、ねおん、顔を上げた。

たまこ あの部屋のあかりはチョウチンアンコウで、

たまこ どっかの路地に入っていったあの影は、

たまこ 深海魚みたいで。

たまこ 私も真っ暗の海の底を泳いでる。

たまこ みたいな。

たまこ 深海の目のつぶれた生き物、

たまこ みたいな。

たまこ はっ。

膨らんだ風船を、たまこは服の中に仕込む。

たまこ あんたがなんか言うとか期待してないから。

たまこ ていうか、今となったらもう、

たまこ なんて妊婦のフリなんかしてるんですか、とか、

たまこ 聞いてこないから、

たまこ 楽。

たまこ ああ、そっか。だから昼間よりいいんだ。この街。言葉がうるさいんだ。速い、速いのよ言葉は。だからうるさい。

たまこ、再び街を見た。

たまこ さむ。

ねおん、こたつに足をツツコミ、スイッチをONにした。

たまこ 路上こたつのくせに電気つくの!?

たまこも足を突っ込む。

あたたかい。

たまこ 始発まで足つつこまさせてもらおうわ。あんたのせいなんだから。

顔をあげて、

たまこ 襲ったら殺すよ。

それがあまりにも本気なので、ねおんは激しく首を振って否定する。

たまこ そこまで拒否るとそれはそれで傷つくんですけど。

ねおんは何も答えない。

こたつにおでこをくつつけて、しばらく。

二人は無言で遠くでかすかに数台動く車の音を聞く。
しばらく。

たまこ 寝てるの？

ねおんは答えない。

Piece 1 1 ちぎられたページには

カサリと、ちぎれたページをとりだした、たまこ。

たまこはそこに書かれた文字を、

読み上げる。

たまこ ほんの少し前までは、空の青は空の青と言わなかったし、頬を撫でる風は風とは言わなかった。例えば僕を締め付けるベビーカーのベルトから逃れようとしたとき、僕は窮屈だという言葉が知らなかったし、自由という言葉も知らなかった。代わりに別のなにかを使っていた。それはもうすっかり僕の体から消えてしまったけれど。わたしのどこが好き？」と聞いた高校生の彼女の質問にどうしても答えることが出来なかった。どこが、どこが好き。君が好き。君そのものが好き。たぶん会話としてはそう答えれば十分だったはずなのに、何かを僕を引っ張るんだ。なんで黙ってるの」と彼女は言った。黙っているんじゃない。考えているんだよ。一番びったりくる言葉を。言葉を、言葉を、探している。体の一番はしっこ足の爪まで探す。僕の中にある言葉を探す。なんでもなにも言わないの？ 好きじゃないの？ どうなの？」好きだよ。好きだよ。好きよりも好きだよ。だから探しているのに、好きよりも好きの言葉が、どうしても見つからないんだ。そう、好きじゃないんだ」どうしてそうなるんだ。違うよ。もつといい言葉を探している最中なんだ。好きだよ。すごく、すごく好きだ。好きだから「ほら、薄まっていく。僕の体のなかで動いていた好きよりも好きの感覚が、僕が今持っている言葉を使うと、そうじゃないと引っかかる。だけど伝えななきゃ誤解をされるから僕は喋り続ける。好きだよ、好きだ」意味は合ってる。国語辞典を引けばそう書いてあるだろう。なのに、違うと思うんだ。僕のこの感情と、言葉の好きが何万年も離れていく。それは簡単だろう」と父が言った。その子のこと、そんなに好きじゃなかったただけ。だから違和感があったんだ。青春だなあ」と笑った。

もしそうなら、僕は、ひどく、嘘つきな人間だということだ。ほんのすこし前までは、空の青は空の青と知らなかったし言わなかったけれど僕は空の青を感じていてそれがそこにあることはわかっていてもっと別の言葉になる前の言葉でその、それを、それを、それを僕は話していたはず。言葉を覚えるまえの言葉。どの国でも伝わるしどの国にもない共通言語。言葉を覚えるまえの言葉。生まれたての子供を見つけたら僕は心の中で念じる忘れちゃいけない。言葉を体にいれちゃいけない。人間の言葉を覚えてしまうと、僕らのこの言葉を忘れてしまうんだ。分かるかい、伝わるかい。僕はもう君たちの言葉が分からなからね。知っていたはずなのに忘れてしまったんだ。交差点、信号待ちのベビーカー。むずがる子どもをじっと見つめる。なんですか「母親が精神の警戒のアラームを作動する。なんですか、なにかご用？」僕はただ、彼らに伝えたくて見つめていただけ。それは母親にとっては要注意人物となる。違うんです。可愛いなと思って……と言えばさらに警戒を強められるだろうし、それはびったりくる言葉ではない。伝えただけで、でもそれを言えばさらに警戒はレベルを引き上げ僕はすぐその交番へと突き出されるだろう。町はコドバで溢れかえっている。でもどれもびったりくる言葉じゃない。僕は別の惑星から来たんだろうか。この惑星の言葉じゃ息が出来ない。だけど別の言葉が見つけられない。

たまこ 言葉になる前の感情、風景を伝えるには、やっぱり言葉なんだよ。ねおんくん」

たまこ 先生、どうか僕を“普通”に戻そうとしないでください。

たまこ 君が言葉を捨てることを選んだのなら仕方がない。しかしそれは文明を捨てるということだ。言葉は手段だ。たくさんの手段を知れば違和感もなくなる。つまりね、「

たまこ 先生、どうか僕を“普通”に戻そうとしないでください。

たまこ 大人になればボキヤブラリーが増えるから、それだけピツタリとくる言葉を話せるようになるよ。だから、本を沢山読みなさい。色んな言葉を吸収しなさい」

たまこ 大人になってもこの違和感は消えない。それどころか僕を孤立させる。交差点。スクラブル。すれ違う言葉。看板、大画面から言葉。笑い声。早い。速い。速すぎて動けなくなる。漏れる言葉は言い訳じみってくる。

たまこ 僕は知識と経験で話す。だけどね、知識を動かすのは心だ。そして心を表すのは、言葉だ。頭の中で、僕は言葉で考えるんだ。黙ってみてごらん。何かを考えてみて。君はなにで思考している？ 言葉だよ。口から発語しなくてもね、僕は言葉によって生かされているんだよ。」

たまこ それなら僕は生きてはいないのかもしれない。先生、僕は言葉そのものを忘れ去りたいんです。したらまだ言葉になる前の言葉が、戻ってくるかもしれない。空の青を、空の青という言葉を知らなかった頃に、それでも何かを思ってた頃の、その、誰も覚えてはいないだろう共

通言語を、取り戻せるかもしれない。

たまこ 「いいかい。ねおんくん。朝昼にこの薬を飲みなさい。落ち着くから」

たまこ 先生、どうか僕を“普通”に戻そうとしないでください。

たまこ 君は自分の意思で言葉を捨てる。なら、どうやって暮らしていくつもりかな」

たまこ 流れてくるネジをしめるのに言葉はいらない。誤解を受けるなら受け入れればいい。説明の言葉も弁解の言葉になる。主張の言葉も言い訳の言葉になる、町に言葉があふれている。僕らは言葉を食べている。言葉そのものを食べている。だから僕は、食べたくないし、誰にも僕の言葉を食べさせたくはない。なのに先生。体の中で言葉が渦巻きます。考えれば考えるほど、思い詰めれば詰めるほど、言葉が体を這いずり回る。目の前に流れてくるベルトコンベアに乗ったネジみたいに、僕の体の中を言葉のベルトコンベアが流れる。どれも使い物にならないネジと同じように、使いものにならない言葉が大量生産されていく。違うんだ。こんなことを考えたいわけじゃない。黙らなきゃ。心の奥底から黙らなきゃ。言葉が僕を覆い尽くす。心を無言にして、僕は言葉から逃れようとする。でも言葉になる前の言葉を僕は思い出せずにいるから、僕は空っぽになっていくみたいだ。違う違う。全然空っぽになんかならない。逃れたいはずの言葉が追いかけてくる。先生、止まりません。思考の言葉が止まりません。爪の先にまで言葉が滲み出てきそうなくらい、止まりません。僕は別の惑星からの訪問者でこの地球上の言葉がなにも理解できずにいるみたいでなのにこの言葉しか使えなくて止まりません。こんなことを考えたいわけじゃないのに心が黙らない黙らないんです。

たまこ。

ちぎったノートのページを読み上げる。

読み終わると、

たまこ ……中2病……？

一言で片付ける。

ねおんは眠り続ける。

たまこ ……私もか……？

Piece 1 2 たまこ そこに至るまで

突然、過去の記憶がたまこを引っ張る。

父の影 たまこ。

目も鼻も口も見えないただ真っ黒い人影が、
こたつでまどろむたまこの髪の毛をつかんで引きずり出す。

父の影 いい加減にしろ。

母の影 お父さん、やめて。

父の影 そんな格好で毎日毎日お前近所で何て言われているのか知ってるのか。キチガイだぞ。キチガイ。キチガイキチガイキチガイキチガイ。

母の影 お父さん。

たまこ 思い出させてるのよ！

父の影 なにをだ。

たまこ 私の細胞のもっともって向こうの、まだ私じゃない私の細胞が思い出すように。
父の影 だめだ。ほんつとにだめだ。象だって2年だぞ。

母の影 妊娠期間の話よ、たまこ。

父の影 お前3年もそんな腹で歩き回って、

たまこ どう膨らむのか細胞が思い出すかもしれないじゃない。

父の影 お前の腹が膨らんでんじゃないだろう、これは、

父の影、ぱぁんと風船を割った。

たまこ、すぐに次の風船を膨らましにかかる。

父の影、それをとめる。

たまこ、抵抗する。

母の影も割り込んで三つ巴になる。

父の影、思い切りたまこと母の影を振り払う。

父の影 相手の男もいるわけじゃなし、なのにいない子どもの母子手帳記入するのはキチガイなんだよ。

わああああああ、と母の影が泣く。

母の影 私のせい私のせい私のせい。

母の影はたまこを抱きしめる。

が、

たまこはひたすら風船を膨らます。

母の影 まともに産んであげられなくてごめんね。こんな体に産んでごめんねごめんねごめんね。どうにかならなかつたのかしらどうか。

父の影 もっと早く念入りに調べてもらっていたらもっと早く分かったのに、

母の影 あなたに女の気持ちは分からないわ。ごめんねごめんね。たまこ、あなたも女の気持ちも、母親の気持ちも、なんにもなんっつにも分からないなんて。可哀想ね可哀想だわ何もかも終わりだわごめんねごめんねごめんね。

父の影 お前いつの時代の話してるんだ。子どもだけじゃなくてほかにもいろいろあるだろう。

母の影 あなたには分からないのよこのつらさが。つらいでしょうつらいでしょうたまこ、つらいわよね。つらいに決まってるわ。死にたくなるでしょう。自分って意味がないって思えるでしょう。だってせっかく女の子に生まれたのにせっかくこんな可愛いのにせっかくちよっとあなたどこ行くの。

父の影 ちよっと。

母の影 ちよっとちよっとちよっとってあなたいつもそう。

また、母の影は悲痛に泣く。

たまこは、風船をお腹に仕込みながら、ぼんやりと思い出に答える。

たまこ 大嫌いよ。お父さんもお母さんも。

母の影の泣き声や、父の影の罵声は、いつしか日本語からかけ離れて、宇宙語のようになり聞き取れなくなる。言葉が言葉として、壊れていく。

たまこ そんなスケールの小さい話じゃない……って。

たまこ 私は。

たまこ もっと、気が遠くなるような、ことが、

たまこ 頭を駆け巡るの。

今度は別の黒い影が、たまこの側ににじり寄る。

彼氏の影 じゃあさ、じゃあさ、たまこちゃん、じゃあ、

たまこ こいつも大嫌い。

彼氏の影 できないんだったら、ゴム、つけなくてもいいよね？

また別の黒い影が、にじり寄る。

ゆかりの影 大丈夫だよ、たまこ。今は最新の医療がスゴイんだよ。なんとかなるよ。

また別の黒い影。

あやのの影 ごめん。たまこにはツライかなと思って年賀状出さなかったんだ。ほら、家族写真に、なっちゃったから。

また別の黒い影。

ちかの影 別にあれじゃない？ あたしも結婚しても子どもは作らないと思うから、それと一緒にじゃん。人間つてもう本能だけじゃなくて文明の生き物だもの。選んでいいじゃん。

たまこ だから女子はめんどいんだってば。そうじゃない。

また、別の影。

医師の影 分かりやすく説明いたしますと、生殖器が未発達なので受精はもちろん、なにより通常の性行為が不可能、ということですよ。

たまこは暗い空に手を伸ばす。

たまこ 違うんだって。なんて言ったらいいか、違う。私が悲しんでるんじゃない。勝手に遡っていく。あの大嫌いなお父さんとお母さんに遡って、それからお母さんのほうのお父さんとお父さん、お父さんのほうのお母さんとお父さん、お母さんのお父さんのほうのお父さんとお母さん、お母さんのお母さんのほうのお父さんとお母さん、どんどん遡って、枝分かれして行って、さかのぼってどこまで行くの、私じゃない私がどんどん増えていて、

たまこ、両手を空にむける。

たまこ 広い。

たまこ 広い。

たまこ 広くて広くて広くて、

たまこ 私が、

たまこ やってきた、道のり、が、

たまこ 広くて遠くて、

たまこ どこから、

たまこ どこまで、も、広くて、

たまこ もう私の意識が届かない私がたくさん、たくさん、それが勝手に私を責めてくる。

オマエ ハダレダ」

と、文字が頭の中で浮かぶ。

たまこ わたし。

ナニガ ノコル」

と、誰のものともわからない言葉が、浮かんで消える。

たまこ わたし。

オマエ ハイキモノ ダロウ？」

たまこ 宇宙に、責められてる、みたいで。

たまこ 違う。空は、そんなの、責めたりしない。

たまこ 私が、勝手に、責めてる。私が、私の、爪の先が、責めてる。私の、髪の毛が、浮き出た血管が、まっげが、指の逆剥けが、ほっぺたの裏側が、耳たぶが、産毛が、落ちた汗一粒が、私を、作った、小さい細胞が、が、が、が、荒地にはなんも育たない。花も果実も、雨を染み込ませても。荒地だから実りはない。荒地には、私……

これ以上膨らむはずのないたまこの腹が、

たまこ わ、たし……？

どんどん、膨らんでいく。

どんどん、どんどん、膨らむ。

Piece 1[∞]

3人の白衣の研究者たちがやってくる。

ざわざわと。

バタバタと。

膨らんだたまこの腹に耳をつける。

研究者 D 聞こえますか。

研究者 Z 聞こえますね。

研究者 V 自転車のベル。

研究者 D 車のクラクション。

研究者 Z 踏切。

研究者 a 足音。

研究者 D 食器の音。

研究者 Z あ、犬が吠えた。

研究者 A 雑踏。

研究者 D 町の音……

研究者 A は、一切聞こえませんか。ならばなにが聞こえますか。

耳を腹につけて澄ます、と。

研究者 D 風ですね。

研究者 Z 風ですか。

研究者 A それではさらに調べていきましょう。

研究者たち、ぐっとたまこの両足を広げようとする。

たまこ ちょっと！

研究者 D なにか言いましたか。

研究者 Z いえ、私はなにも。

研究者 V 空耳です。被験者は目を覚ましません。

たまこ ちょっとちょっと触らないで勝手に覗かないで頼んでないから！

研究者 D ひよっとして喜びの声ではありませんか。

研究者 Z この被験者の？

研究者 V なるほど。これからの人類に少しでも役立つわけですから。

たまこ 知らないそんなこと。私は私のことしか考えられないんだから知らないから！

研究者 D 女体は何を孕むのか。

研究者 Z 通常ではないものを孕むとしたらそれは異形でしょうか。

研究者 A 異形を超えた正常ですよ。だってこの中にあるのは、荒地です。

たまこ 知らない！ そんなの知らない！ これはただの風船だって、やだやめて！

研究者 D 荒地ですね。

たまこ 笑うな！

研究者 Z ジャンクとも言いますが今となってはそれは誤りでしょう。

研究者 A 意味のないもの、

たまこ 意味がないとか言うな！

研究者 A と、言われていたのも昔です。

研究者 D 荒地にはスイッチがある。

研究者 Z 探さなくては。

研究者 A 全てを操作するのはこの荒地にあるスイッチでは、

研究者 DNA ないのか？

研究者 D 荒地がなければ動くものも動かない。

研究者 Z 道のりは長いでしょう。

研究者 A 荒地のスイッチはまだまだ研究発展途上ですから、

研究者 D 被験者の未来への貢献に、

研究者 DNA 感謝。

たまこ 知らない。知らない。触らないで覗かないで未来なんか知らないどうでもいいよ
考えてもどうにかなることじゃないんだから触らないで。

研究者 DNA あ。

たまこ なに……？

研究者たち、なにかを見つけて、息を飲む。

荒地に吹きすさぶ、風の音が聞こえる。

びょうびょうと。

たまこ なによ、なに、なに……!?!?
研究者D あれは、なんでしょうか。
研究者Z スイッチ、でしょうか。
研究者V いや、スイッチを、持っているのが見えますか。
研究者D 見えます。
研究者Z あれは、
研究者V 荒地にさすらう、漂流者が見えます。
研究者D 漂流者。ただの浮浪者ですか。
研究者Z いえ、漂流者です。
研究者A あれは進化の兆しでしょうか、それとも、退化の兆し、でしょうか。
大きく膨らみすぎたたまこの腹が、
割れた。

Piece 1 4

パレードの花吹雪が舞う。
色とりどり。
紙の吹雪。
空は青い。
パレードが行進する。
車、人、見物人たち。
その行進の曲が、なぜか、
ドリフターズであることにたまこは気がついた。
聞こえてくる8時だヨのエンディングテーマ。

ババンババンバンバン
ハアビバドン
ババンババンバン
ハアアビバドドン

歯あみがけよ。

ババンババンバンバン

宿題やれよ。

バンバンバンバン

たまこはそれをただじっと見ている。

男3 おう、お姉ちゃん、あんたも乗るかい？

たまこ 私……？

男2 アンタも流れもんだロ？

男1 どこにもたどり着かない落ち着かない根っこもないはぐれモンの余計者の流れるさすらい人だろう？

たまこ 私は、

男3 流れ流されさすらって、

たまこ どこに行くの？

男1 どこにもいかねえよ。

男2 行けるわけないネ。

たまこ どこにも行かないのにさすらうの？

男3 さすらうから未来がなくなるんだな。

たまこ え。

男3 あんたも未来に行けない漂流者だろう？

男1 なんにも残さないジャンクだろう？

男2 なんにも残らないジャンクだろう？

男3 乗り物なくなっちゃまったから、だから歩くしかねえんだよ。なあ、パレードだ。

たまこ ……責めないで。

男1 だけど後ずさりのパレードだ。

男2 進めるかい？

男3 歩けるかい？

たまこ、一歩歩こうとするけれど、

ドリフターズたちに足を掴まれて一歩出しても戻される。

色とりどりの花吹雪。

舞い落ちる。

たまこは一歩歩くが二歩後ずさらせられる。

景色は町。

歩けないたまこを置いて、

風景のほうがどんどん進む。

たまこ 速い……

たまこ 速い……

たまこ 速い……

たまこ おいてかないで。

たまこ 速い。

たまこ ついて、いけない。

たまこ 足が、

たまこ、手を伸ばす。

どこへ？

未来へか？

しかし掴めない。

たまこ 責めないで……

町の風景はたまこを置いて、どんどん進む。

たまこ 速い……！

伸ばした手を、諦めて降ろそうとしたとき、

目の前に人影を見る。

もがいて、

手をさらに伸ばす。

見えるのは、

手を差し出している、ねおん。

たまこは叫んだ。

一歩進むために、たまこはその手を、

掴んだのかもしれない。

現実には、

Piece 1 ♪

こたつにつつぷしたたまこの指先、
苦しくて空をかきむしるような指先を、
ねおんが掴んだ。

ドン。

同時に、その大きな音で目が冷める。

たまこ あ。

ねおんがたまこを見る。

たまこ 寝てた、私。

路上のこたつ。
始発の電車が動きだす。
太陽がビルの間から見える。
ドン。
音は聞こえ続ける。
たまこはそれを見る。

たまこ ……パレード。

吹奏楽の華やかな行進曲。

たまこ ああ……そうか。オリンピックの……パレード……

よく見ると、

こたつには他の3人のドリフターズたちも足を突っ込んで眠っている。
誰かが寝返りを打った。

男1 のあっ！ いてえっ！

男2 エなになに。

男2が飛び上がって起きる。

男2 え、あ、アレー！？

たまこを見て驚く。

男2 ちよちよちよチヨ、

男3 うるせえ。

男1 なんだ、狭いと思ったらひとり増えてたか。

男2 昨日夜中だったから見えなかったねエ。

男1 あっ！

男3 だからうるせえ。

男1 見ろ、ねおんが手握ってる！

たまこ お邪魔しました。

男3 いやいやお嬢さん、こたつに入ってゆっくり話でも、

たまこ 仕事あるんで。

男1 昨日の夜はなにがどうなって？

男2 みおもー。

たまこ 酒くさ……

男3 いや、昨日は馬が、馬がさ、いい具合にさ、

男2 きたネ。

男1 飲んだね。

男3 やっぱ体の中からあっためないと。

男1 え、ねおん、やった？

たまこ 失礼しました。

男2 今日の夜も割烹着のボランテアするノ？

男3 えらいねえ。事情とか聞きたいねえ。

たまこ 別に。役に立ちたいだけです。あなた方とはちがつて。

男2 あれー。キツイねえ。

男1 俺結構役に立つ人間よ。

男3 ちょっとモーニングコーヒーでも飲みながら語り合おうじゃない。

たまこ 語りません！

男1 え、で、もうやった？

男3 あんたも好きねえ。

男1 え、だってねおんだっていい年のいい男だし、

男2 エ、でもココでやっちゃあ青カンだよね。

男3 あんたも好きねえ。

たまこ 離してくれない？

ねおんはたまこの手をつかんだまま離さない。

たまこ ちょっと。

離さない。

たまこ ちょっと！

離さない。

男3 あんたも、好き、ねえ。

たまこ ていうか、別になにもありませんから！

男2 エ、でもねおんのほうはなんかありそうだけど。

たまこ ねおんって……

男1 お前名前も言っていないのか、ああ、言わないのか。

男3 じゃ当然お嬢さんの名前も聞いてないんだな。

男2 エ、じゃあ、名前も聞かずに一夜を過ごした？

たまこ だからそーゆー過ごし方はしてませんから。

男3 いや、男女は名前を聞かずとも関係することもある。

たまこ だからないって。

男3 ちょっとだけよ。

男2 マ、そのほうが情熱的だね。

男1 あーうらやましいぜ。

たまこ あんた、なんか否定したらどお！？

男1 あ、ダメだよ。こいつぜってーしゃべんないから。

男3 いんや。ちよー介が「こいつ働きにきた時はちよいちよ喋ってたけどもう今はダ
ンマリ」だって。

たまこ ちよー介？

男3 あ、シエルタートツカン組になるまえの、工場長ね。顔がいかりや長介にそっくりで。

たまこ は？

男3 あ、知らねえんだわ平成生まれが。ドリフターズ、かわいそうだねあの感動を知らないなんてね。

男1 ババンババンバンバン。

男3 歯みがけよ。

男2 ドリフターズはだから漂流者だつて。

男1 おま、ほんとなに言ってるの。

男3 そりやお前って子どもんころはこっちじゃねえだろ。

男2 うん、香港だネ。

男1 香港マフィアの血筋は嘘なんだろ。

男2 アイヤ、本当。

男1 どっちだよ。

男3 だめだこりゃ。

意味不明でもなぜか大ウケする3人。

ガン。

突然、ねおんの頭がこたつに激しくぶつけられた。

たまこ ！

驚いて、男たちとたまこはねおんを見る。

兄 やつと見つけた。

ねおんの頭をこたつに打ち付けたのは、

見知らぬ男。

叔父 どうも。

たまこたちを蔑むように見た。

叔父 浮浪者の皆さん。

Piece 19

男 1 ふ、ろう、しゃ？

男 2 エ、僕ら？

男 3 うーん間違いではないな。

男 1 いや違うだろう。

男 2 でも僕たち路上生活者でしょ。

男 3 いや、あくまでもストリートライフアー。

男 1 まだ浮浪者じゃねえぞ。

そんな男たちの会話など聞きもしないで、

叔父 甥がお世話になりました。

丁寧な言葉とはうらはらに、叔父は乱暴にねおんをこたつから引き摺り出す。

男 3 おーい！？

男 1 ねおん、お前、身内いたのか！？

男 2 帰る家があるなら帰ればよかったのニイ。

男 3 の、わりには、

男 1 これ甥っ子を扱うカンジじゃないな。

兄 甥がなにか面倒なことを起こしませんでしたか。もしあれでしたらこれで。

ひらひらっと1万円札を数枚こたつの上に落とす。
それがなんとも嫌味だ。

男1 ……はあ？

男3 別にお金をもらうようなことは、俺らもねおんもしてませんけど。

叔父 あとでいろいろ言われたすと面倒なので、今こころ全てを清算、でよろしいですか。

男2 エ、ごめん。僕やつぱり日本語難しい。この人の言ってることなんもわかんないや。

男3 やー、大丈夫だ。俺もさつぱりわからん。

叔父 それでは。

たまこ どーでもいいけど。

たまこがやっと口を開いた。

たまこ そいつ、あんたとは一緒に行きたくなさそうだけど？

ねおんはこたつにしっかりとしがみついている。

叔父 行きたいか行きたくないかなどは関係ありません。行かなければならない。それだけです。

たまこ 叔父だって証拠ある？

叔父 あなた方には関係ありませんね？

しかしねおんはジタバタと抵抗する。

叔父 見てのとおり甥は通常ではありません。

たまこ つう、じょー。

叔父 不完全と言いましょうか。欠陥と言いましょうか。ゴミと言ったほうがびつたりか
もしれません。

たまこ ごみ。

叔父 この年になってもひどい癩癩を起こしますので、ああ、近づかないで。狂犬病のよ
うになりますよ。

叔父はねおんの首根っこをひねり上げるように。

ねおんは怒りの声を発する。

叔父 ほらほら。獣のようでしょう。困りますね。甥は言葉を捨てた時から人間をやめた
ようです。脱走しては連れ戻しその繰り返し。完全に縁が切れればこんな思いもせずにい
られるのに、大きな問題を起こしてからでは取り返しがつきませんのでね、面倒は見なけ
ればなりません。甥ですから。私のほかに身寄りもありませんので、しかしいつそ自ら死
んでくれたらと何度も思いました。

たまこ あんた、頭おかしいんじゃない？
叔父 いいえ。おかしいのは甥のほうです。こいつは未成年の時に父親を殺しまして。つまり私の兄のことです。

こたつに入っていた男たち。
一瞬にして、ひく。

叔父 まあ事故といえば事故ですが。よくある話ですよ。父親と口論になって、青春の1ページによくある話です。ですが彼は口下手というか、まあ、バカなのでね、うまく言えなくて癩癩を起こして父親に突進したら、まあ、ひっくり返って階段を転げ落ちて打ちどころが悪く。事故です。事故ですね。事故なのか故意なのか。そのすぐあとで母親は悲しみのあまり自殺。私が面倒みるよりほかはなく。
たまこ だから、病院に？

たまこ、ひきちぎった。ページを差し出す。

叔父 カウンセリングノートね。

たまこ 病院に戻すの？

叔父 そこしか行き場がないんです。もしくは首に鎖をつけて犬小屋という手もあるか。

たまこ 言葉喋らないと人間じゃないの？

叔父 差別的な言い方をしますね。

たまこ あんたそう言ったよ。

叔父 言葉を捨てる、です。自分から言葉を捨てるのは、文明を捨てるということですからね。

たまこ 理解する気ないの？

叔父 頭がおかしい人間を理解するのは常識ある私たちには無理でしょう。

たまこ だから、頭がおかしいってなんで決めつけるの。

叔父 見て分かりませんか？

たまこ どう見たって人間でしょ。

叔父 これが？

ねおん、叔父の手から逃れようと唸る。

もがく。

バタバタと。

獣のように。

叔父 また癩癩を起こして誰かを傷つけやしないかと憂鬱になります。そういう問題のある人間が家族にひとりいるという苦しみを、あなた方のほうこそ理解しないのでしょうか。いいです。あなたたちには、関係のないことです。
たまこ それで、ゴミっていうわけね。

叔父 はい。ゴミです。ジャンク。ゴミ。なにひとつ役にたたず無用に酸素を吸うだけの、世の中ゴミが多くて疲れませんか。

たまこ ゴミ

叔父 生活すると出るからキリがないですがやはりね、いろんなことを綺麗にしておかないと。季節ハズレのオリンピックピックも始まることですしね。

たまこ ゴミね。

叔父 ここもね。

叔父、ぐるっとドリフターズたちを見渡した。

叔父 一掃されるでしょうけど。

たまこ あんた。

叔父 何でしょう。

たまこ 本当に身内？

叔父、ニツと笑った。

叔父 あなた方には何の関係もないことです。

たまこ、手を差し出した。

叔父 何ですか。

たまこ あんたにじゃないわよ。そっちの、

たまこ ねおん。

ねおんは、もがくのをやめてたまこを見た。

たまこ ゴミは黙って静かに腐っていけって、言ってるんだよその人。

たまこ あんた腐りたいの？

たまこ あんたゴミなの？

叔父 この方はなんですか。

男1 あ、ただの割烹着のボランティア。

男2 あるときはラブホの清掃員？

男3 またあるときは妊婦コスプレ？

叔父 で、その正体は？

たまこ あなたのいう、ジャンクよ。

Piece 17

ドン。

大きな音がした。

男 1 花火？

男 2 昼間だよ。

男 3 オリンピックのなんかだろ。

男 2 だから開会式は夜だってバ。

男 1 パレードだ。

ドン。

また、大きな音がした。

ドン。

ドン。

ドン。

なんだか、妙だ。

ドン。

ドン。

ドン。

たまこ パレード……？

ドン。

ドン。

ドン。

たまこ なんだか……速い……

ねおん以外の誰もが、ゆつくりと、その音のする方を見上げる。
空を、見た。
何が見えたのか。

男3 は……しまったなあ。シエルターに入り損ねた。

ねおんだけはたまこを見ていて、
誰もが空に気をとられている瞬間、

ねおんはたまこの手をとった。

たまこ、ねおんを見た。

瞬間に、

ドン。

闇が降りた。

Piece 1 ∞

暗闇。

赤黒い、暗闇。

たまこだけが立っている。

びようびようと風が吹く。

こたつはひっくり返って、

街灯は消えている。

ドリフターズたちは横たわっている。

兄も横たわっている。

偽物の腹を膨らましたたまこだけが、立っている。

たまこの手の先には、

ねおんの手が繋がっている。

たまこ　ねおんを見る。

たまこ　あんたは、生きてる？

しかしねおんは答えない。

たまこ　答えなさいよ。

ねおんは答えない。

たまこ 答える。

たまこはねおんの手をひく。
が、びくともしない。

もう一度強くひく。
が、びくともしない。

それから何度も何度も試してみる。

たまこ 笑っちゃいそう。

たまこ 吹っ飛んでるのに。

たまこ 笑えるし泣ける。

たまこ なんでこの柔い風船が残ってるの。

たまこ なんで。

たまこ ジャンクの私が残ってるの。

たまこ 意味ないじゃん。

たまこ 行くよ。

しかし、

たまこ どこに行きやいいか分からないけど、その、
やはり、

たまこ シェルターって、

びくともしない。

たまこ やっ

たまこ、ねおんの手を引っ張るが、
やっぱり微動だにしない。

どれだけ引っ張っても、動かない。

たまこが手を離さないのか、

手が離れないのかは、

分からない。

たまこ、

とうとう、力尽きた。

ねおんと手をつないだまま、

しゃがみこむ。

乱れた息を、整えることも、もうしない。

風だけが吹いている。

たまこ、ただ見渡す。

たまこ 荒地……

たまこ もう、いいか。

たまこ 荒地。

たまこ もう終わりか。

たまこ 荒地。

たまこ 向こうまで、赤黒い。

ただ風が吹く。

たまこ なんだ。全部全部なにもかも、なんだ、そうなんだ、意味なんかないじゃない。

たまこ、自分の偽物の腹をみる。

たまこ なのに、

服を剥ぎ取って、サラシを取って、あらわにする。

たまこ ただの風船。

たまこ どうみたって風船。

たまこ、少し笑った。

たまこ 私も、

たまこ、風船に口をつけたかと思うと、

たまこ 荒地。

噛み切る。

と、

空気で膨らませていたはずのそれが、
弾ける。

水。

水滴。

飛び散って、

濡らす。

たまこを。

濡らす。

と、その瞬間に、

「あ

空中に、ねおんの言葉が浮かぶ。

たまこ え。

あ」

浮かんで、消える。

たまこ、繋いだ手の先、

ねおんを見上げる。

たまこ なに？ 今なんて言った？

「生まれた」

たまこ 誰が？ あんたが？

「生まれた」

たまこ ……私が？

「生まれた」

たまこ あんた、生きてる？

たまこ ねえ。

たまこ 答えてよ。

たまこ ねえ。

たまこ ねえ。

もうなにも浮かんではこない。
ただ風が吹く。

たまこ、見渡す。

たまこ こんなところでも、生まれちゃったら、

風が吹く。

たまこ 生きていくしかないじゃない。

たまこ、喉から勝手に声がほとぼしる。
それは泣いていると言っているのか、
鳴いていると言っているのか、
もっともっと原始的な、
産声と言っているのか。

荒地にはなんも育たない。
花も果実も、雨を染み込ませて。

荒地だから実りはない。

荒地にはなんも育たない。

そのかわりに、

荒地にはスイッチが隠されている。

花の種を作り出すスイッチ。

果実を甘くするスイッチ。

雨の中から必要なものを吸い取るスイッチ。

荒地にはなんも育たない。

スイッチだけがある。

それが、荒地以外の土地を実らせる。

たぶん、実りのスイッチもあれば、

破壊のスイッチもある。

荒地には全てのスイッチが、

埋まってる。

私は探す。

荒地を探す。

固い乾いた土を掘り起こす。

爪の間に入り込んで黒い。

そのうち、

あんまり固いから、

土に負けて爪が剥がれる。

血の赤色まで吸い込むけど、

すぐに乾く。

乾く。

乾く。

乾く。

荒地は乾いて、

私は泣き始める。

それもすぐに、乾く。

掘っても掘っても、

スイッチは見つからない。

やがて剥がれた爪の先の、指の肉まで剥がれる。

骨が見える。

骨が碎ける。

荒地で私は立ち尽くす。

荒地にはなんも育たない。

荒地だから実りはない。

荒地にはなんも育たない。

そのかわりに、

荒地にはスイッチが隠されている。

花の種を作り出すスイッチ。
果実を甘くするスイッチ。

雨の中から必要なものを吸い取るスイッチ。

実りのスイッチもあれば、

破壊のスイッチもある。

荒地には全てのスイッチが、埋まってる。

荒地にはスイッチがある。

荒地にしかスイッチはない。

私は探す。

種を、

花を、

緑を、

果実を、

私は探す。

荒地を探す。

スイッチを探す。

荒地が、

荒地以外の土地を実らせる。

荒地が、

荒地以外の花の種を作り出す。

荒地が、

荒地以外の果実を甘くする。

荒地にはなんも育たない。

でもだから探す。

でもだから歩く。

でもだから進む。

進む。

進む。

進む。

この荒地を背負って。

しかしその声も、

風が掻き消していく。

たまこ、

立ち上がる。

そっと、ねおんの手を外す。

硬直した屍体はそのままに。

たまこ、歩き出す。

漂流者のごとく。

おしま